# 川上宏奨学金受給研究成果報告書

研究題目：廃テーマパークの価値―非日常性から考える

1．研究目的

本研究は、先行研究では取り上げられていない廃墟と化した「廃テーマパーク」を対象としたうえでテーマパークと廃墟のそれぞれの非日常性より廃テーマパークの価値について考察しテーマパークの１つのカテゴリーとして「廃テーマパーク」が成立する可能性を明らかにすることを目的としている。「『廃テーマパーク』こそが真のテーマパークなのではないか。」という問いを掲げ文献調査・フィールドワークを実施した。

２．研究方法

本研究でおこなった調査は、主に文献調査、フィールドワークである。

まず、1980 年代～1990 年代のテーマパークブームの要因を明らかにするため文献調査を行った。また、1980 年代～2010 年代の廃墟ブームの変容や背景を明らかにするため各年代の廃墟写真集より分析を行った。さらに、廃墟がもつ非日常性と日常性に根拠を持たせるため 1980 年代～2010 年代の廃墟写真集の写真より分析を行った。

次に、テーマパークがもつ非日常性を明らかにするために＃東京ディズニーランドとタグ付けされたインスタグラムの投稿を対象とし、種類(静止画・動画)、撮影場所、被写体、グッズに着目し分析を行った。

「廃テーマパーク」がもつ非日常性を明らかにするために、新潟県にある廃墟化したテーマパーク『新潟ロシア村』にてフィールドワークを行った。

テーマパーク、廃墟、廃テーマパークにて、人々がこちら(日常)からあちら(非日常)へと移行する瞬間にも着目し、人々がこちら(日常)からあちら(非日常)に移行する機能を果たすものを「ゲート」と名付け、写真より分析を行った。

３．研究結果・考察

まず、テーマパーク、廃墟、廃テーマパークそれぞれの非日常性に関しては以下の通りである。テーマパークは受動的かつ共時的な非日常性をもち、廃墟は廃墟によって非日常性が異なり【異空間】【ミステリアス】【再生】【ストーリー性】【タイムスリップ】【光と影】の 6 種類有していることが明らかとなった。廃テーマパークは外観より「テーマパークとしての非日常性」が感じられ内観からは「廃墟としての非日常性」が感じられ、テーマパークと廃墟の非日常性を有していることが明らかとなった。

すなわち、新潟ロシア村がテーマパークと廃墟の非日常性を有しており、テーマパーク

よりも廃墟の非日常性も有している点で「『廃テーマパーク』こそが真のテーマパークである。」ことが明らかとなった。

次に、テーマパーク、廃墟、廃テーマパークそれぞれのこちら(日常)からあちら(非日常)への心理的変化点については以下の通りである。テーマパークには「視覚的な『ゲート』」と「身体的な『ゲート』」があり、空間の「ゲート」であることが明らかとなった。廃墟にはテーマパーク同様、「視覚的な『ゲート』」と「身体的な『ゲート』以外に時の「ゲート」が見られ、空間の「ゲート」と時の「ゲート」を有していることより、時空の「ゲート」であることが明らかとなった。また臭いの「ゲート」が存在することも明らかとなった。廃テーマパークには、主に3つのゲートが存在した。こちら(日常)からあちら(テーマパーク)へと誘う「日常からテーマパークへのゲート」、人々をこちら(テーマパーク)からあちら(廃墟)へと誘う「テーマパークから廃墟へのゲート」、人々をこちら(廃墟)からあちら(廃墟)へと誘う「廃墟のゲート」である。また廃墟同様、臭いの「ゲート」が存在することが明らかとなった。

今回の研究では、廃テーマパークがテーマパークの1つのカテゴリーとして成立する可能性については言及できたが、「廃テーマパーク」がテーマパークとして再開するには、消費活動の再開や資金繰り、廃墟マニア以外へのアプローチなどさまざまな現実的な問題が浮き彫りとなった。今後、大学院でより現実的に廃墟を有効活用できる方法について消費行動・経営の面から研究を行いたい。

## ４．謝辞

本研究をおこなうにあたり奨学金を給付してくださった故川上宏先生とご家族、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。奨学金をいただけたことで文献調査・フィールドワークともに一歩踏み込んでおこなうことができました。ありがとうございました。